RIKKYO MOVE
More Valuable Education
立教大学　大学教育開発・支援センター

Newsletter
Center for Development and Support of Higher Education
26

開催報告

春学期FD講演会

「オンライン授業の成果と課題―第2回立教大学教育活動特別賞受賞者の経験から―」

［2021年7月2日］

コロナ禍におけるオンライン授業実施の過程で見えてきた成果と課題を共有することを目的として、FDプログラム「オンライン授業の成果と課題―第2回立教大学教育活動特別賞受賞者の経験から―」を開催しました（於 Zoom）。登壇者には、第2回立教大学教育活動特別賞受賞者である早川吉尚先生（法学部教授）と田中真知先生（観光学部兼任講師）をお迎えしました。計79名の皆様にご参加いただきました。

早川吉尚先生

早川先生には、リアルタイム双方向型で実施されている「法学入門」の教育実践を紹介いただきました。早川先生は、これまで25年間にわたり本学で教鞭をとられ、「法学入門」では、法学部における4年間の学びへのモチベーションを与えることをねらいとして、一貫して板書および学生との対話を通じて授業をされているとのことです。当日、模擬授業形式で当センター関係者が学生役となり、「身近なルールの意味を考える」をテーマに早川先生から投げかけられるさまざまな質問（「水道の蛇口はどちらに回すと水が出ますか？それはなぜ？」等）に答えることで、授業における緊張感のある対話を体験しました。

田中先生には、オンデマンド型で実施されている「トラベル・ジャーナリズム論」の教育実践を紹介いただきました。田中先生によるオンデマンド型授業は、①本講義動画の配信および②リアクションペーパーを通じて学生から寄せられた質問等に対する回答動画の配信から構成されています。学生からの質問には全て授業のテーマに関連づけて答えるようにして、その答えを学生が受けとめることによってさらに自己開示が進み、多数の質問が寄せられていることが紹介されました。結果として、本講義動画（100分以内）＋質疑応答動画の構成となるものの、オンデマンド型にしたことで、学生は好きな時間に聴くことができるというメリットが挙げられました。また、評価の対象としない対話の場をZoom上で設定する（自由参加）といった工夫をされているとのことでした。

田中真知先生

両先生の共通点として、学生は他の学生の意見を聴くことを楽しんでいると感じられていること、オンラインであっても学生が他の学生の意見を聴く機会を確保することに努められていることが挙げられます。参加者アンケートでは、「常々学生とのコミュニケーションが大事であると思っていたが、今回その意をさらに強めた」などのお声をいただいております。

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めましてお礼申し上げます。

助教　江幡 知佳

次ページ「コロナ禍を通して感じた教育の不変性・普遍性」インタビュー

お知らせ

当センターではコンテンツを2つ公開しました〈本学教職員向け〉

● **第2回立教大学教育活動特別賞受賞者アンケートの回答**
第2回の受賞者の方々の授業の取り組みや教育に対するお考えを伺うアンケートを実施しました。
ページはこちら ➡ https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/SitePages/winner_2020.aspx（SPIRIT ▶ 当センターHP ▶ その他）

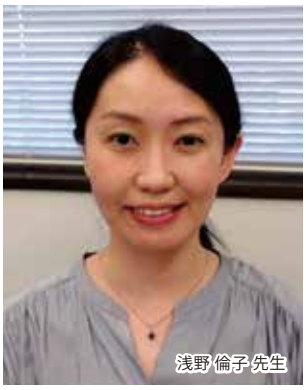
動画『オンライン授業の成果と課題―第2回立教大学教育活動特別賞受賞者の経験から―』
上記FD講演会の動画を公開しました。
ページはこちら ➡ https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/online_class/SitePages/index.aspx（SPIRIT ▶ オンライン授業関連情報サイト）

第2回立教大学教育活動特別賞受賞者インタビュー

立教大学教育活動特別賞は、教育内容や教育方法の工夫・改善により顕著な教育成果をあげた教員の功績を大学として顕彰する制度です。第2回は2019年度の教育活動を対象に選考され、2020年度に授与されました。その間、新型コロナウイルス感染症が蔓延し、教育活動はその方法の変更を余儀なくされてきました。そこで、本号では受賞者のお一人でいらっしゃる現代心理学部の浅野倫子准教授に、受賞の対象科目である「言語心理学」の授業においてコロナ前と現在とで変わったことや変わらなかったことを振り返るかたちでお話を伺いました。

「コロナ禍を通して感じた教育の不変性・普遍性」

現代心理学部心理学科准教授　浅野 倫子


浅野 倫子 先生

「言語心理学（学習・言語心理学）」の概要

・心理学の専門科目　・公認心理師の認定科目　・人の言葉の処理の仕組みを扱う授業

	2019年度	2020年度
履修者数	102名	132名
ー学部学科別内訳	心理学科77%、映像身体学科17%、他学部6%	心理学科80%、映像身体学科5%、他学部15%
ー学年別内訳	2年生6割~7割、3年生2割~3割弱、4年生1割~1割強	
授業形式	教室	オンラインリアルタイム(Zoom)
ーリアクションペーパー	紙で提出	Googleフォームで提出
ー展開	前回のリアクションペーパーの共有約15分→講義→リアクションペーパー記入約10分	
ー資料配布方法	前日までにBlackboardに公開（必要なら各自印刷）	

科目の内容

――「言語心理学」の授業の目標と内容について教えてください

浅野：言語処理の仕組みについて知識を習得することをねらいとしています。特に、日常的な言語コミュニケーションと結びつけて考えてほしいと思っています。科目名について学生から「言葉って心理学なんですか」という反応がよくあります。人間の中での処理という意味で心理学です。学生には、まず言語活動が記憶や思考など様々なものと関わり合う複雑な処理であると、広い目で見てもらいたいです。また、脳のしょうがいで言葉がうまく話せない、発達しょうがいで言葉に遅れがあるというような身近なケースに対して正しく知識を身につけてほしいとも考えています。

言語の仕組みを知っていると、「これもこういう仕組みで面白いんだ」など意外な点に気づきます。例えば、お笑いのボケとは無粋な見方をすればコミュニケーションの不全かもしれませんが、言語的なコミュニケーションのからくりを利用して面白さを生じさせるものであることを、学生が筆記試験の答案に書いてくれると、授業内容と日常生活を結び付けて考えるということが伝わったのだなと思います。

――内容の構成を考えるときに意識していることは何ですか？

浅野：科目を担当した初年度から基本的にあまり変えておらず、この分野の基本に加えて、自分が昔学んだ際に「へえ」と思ったことを入れています。例えば、私自身は、目で見たものの処理の仕方など人間の認知の基礎研究がもともとの専門なのですが、ポスドクの頃に新しく言語と思考の関係の研究に触れて、「なるほど、このように捉えられるんだ」など純粋に面白いと思ったことを、授業の内容構成に大きく反映させています。初年度の授業で、学生が分かりにくそうだった点、分からないなりに楽しそうだった点を反映させ、少しずつ調整しています。

他に、それぞれの回の内容ができるだけ色々なところでつながるようにしています。学生にとってはどうしても情報量が多いと思われるため、できるだけ情報の関係性やつながりは整理して、着目すると興味深い点は言うようにしています。そのようにすることにより、情報のその先を考えられるようになる学生が多いと感じています。授業回の構成は、最初の方でできるだけ基礎知識を教え、その後、必要な情報を重ねて伝えていくイメージでいます。例えば脳の画像だらけの授業を最初からすると消化不良の人が多くなりますが、もともと知っていたあの処理が、脳のこの部位でされている処理なのだとわかれば、理解しやすくなります。授業後に、「わかりやすかった」と伝えてくれる学生が毎年います。

授業の方法について

――授業の進め方について教えてください

浅野：最初の15分程度はできる限り、前回のリアクションペーパーへのフィードバックをしています。講義形式の授業の中でのある種のイ

ンタラクションの部分です。また、最後の10分くらいはリアクションペーパーを書く時間として残すことを心がけています。

リアクションペーパーを書いてもらうのは基本的に学生の声を聴きたいから、出席確認をしたいからです。「授業をきちんと受けていたことが分かるように書いてください」という指示だけします。フィードバックで取り挙げる際、前回十分に伝わっていなかった点が記述から分かれば、それを優先します。次に多くの人が気にしているような点を取り挙げます。私が単純に面白いと感じたものを取り上げることもたまにあります。学生の記述を読んでいると、「他の人すごいな」とか「こういう視点はどのようにしたら持てるのだろう」などの記述もあり、発展的に考えられそうな質問をフィードバックの中で取り挙げることも学生の学びを刺激する意味で有効かなと思っています。

―― 2020年度のオンラインリアルタイム形式ではどのように授業を進めましたか？

浅野：Zoomで画面共有して進めましたが、枠組みは2019年度までの教室の際と変わっていません。PDF資料は前日の夕方くらいまでにBlackboardにアップしておき、授業中に聴きながら書き込みをしたい人は事前に印刷しておくよう指示しています。ペーパーレスはすでに2019年度から行っていました。スクリーンや画面に出るスライドをそのまま配布するので、授業中に眠くなる人も毎年いますが、メモを取るのに精いっぱいで聴けない人が出るよりは良い、そして聴覚しょうがいの学生も履修していますし、全員に同じように配布するのが最も多くの学生が助かる形だろうと考えました。

授業冒頭のフィードバックのときは、私はビデオをオンにして顔を出しています。本編に入ると通信が不安定な学生も確実にいると考え、私はビデオオフにし、ジェスチャーで示す必要があるときだけビデオを復活させています。学生は全部オフです。

―― リアルタイム形式を選択した理由は何ですか？

浅野：私にとって一番やりやすい形式だったからです。また、オンデマンドのみだと集中力が持たない学生もいます。また学生の生活リズムも考えました。通信の問題がある学生は確実にいるので、リアルタイムの授業は録画をして、後でリクエストがあったら見せることにしました。

―― 実際にZoomで授業をしてみて教室の授業と異なると感じた点は何ですか？

浅野：質問が増えました。日常的に見ていてももともと立教生はおとなしいと思っていました。考えていないわけでは全くなく、むしろ非常によく考えていて、ただし周りの目が気になるのか、こんな質問をして平気かと考えるのか、言い出せない様子がありました。それがオンラインになって、チャットであれば私が喋っている間でも直接個別に質問を送れるようになったので、「先生が都合のいいときに読んでください」という形で質問が来るようになりました。私があえて心がけるのは、「匿名でダイレクトメッセージでも構わないので何でも送ってください」と言うことと、出てきたものに対して「これもすごくいいね、自信を持って言ってください」と言うことです。迷惑にならないかと気にしていた学生が多かったようで、質問が増えてとてもよかったと思っています。

言語心理学的にも面白いことがあります。幼児だとビデオで話しかけるのではなく生身の人間が話しかけた方が子どもの学習が進むという研究がありますが、学生から「オンライン授業で集中力が持たず、先生が話す内容も頭に定着しきっていない気がして、今日の話から場の共有や一緒に同じものを見ている感覚が大事かもしれないと思った」などの声をもらいました。このように、授業内容を、Zoomで授業を受ける状況に引き付けて考えてくれる学生もいます。

Zoomでは、講義の途中で「大丈夫ですか」と聞くと、学生が大丈夫みたいなマークを出してくれます。参考情報など伝えたいときに、チャットにURLを簡単に流すことができます。また、聴覚しょうがいのある学生によると、教室よりZoomの方が音声のノイズが少ないためにUDトーク（マイク音声から音声入力を拾い文字にするソフト）の認識成績がいいとのことです。

変化の中での教育の不変性について

―― 授業を振り返ってコロナ以前から変わったことを教えてください

浅野：録画が提供できること、チャットがかなりうまく使えること、意外と学生のリアクションがダイレクトで届く雰囲気があること、学生がオンライン状況に絡めてコミュニケーションや言語のことを考えてくれること、人とのコンタクトについて不安を感じている学生がオンラインだと安心して授業に参加できることといった良い点があります。一方で、コロナで孤独感を感じる学生もいます。オンライン授業には、利点もそうでない点もあると感じます。

その他、情報伝達の仕方をより意識するようになりました。今の状況は学生にとって友達のサポートが受けられず、また圧倒的に情報過多であると感じます。コロナ以前は多少うっかりしている学生でも周りに友達がいれば様子を見て修正できていたはずですが、今は、その機会が奪われてしまっています。できるだけ明確に言葉で伝えること、形に残るようにBlackboardに書き、メールでも配信するなど、多くのチャンネルを使いできるだけ何度も伝えることを意識するようになった1年でした。

―― 広く教育活動に対して変わったことと変わらなかったことは何だと感じますか？

浅野：急に課せられた制約の中で、どうしたら授業の内容を最大限に伝えられるか、どうしたら授業の目的を最大限に実現できるかを、授業期間中いつも考えていました。また、最低限に伝えなければならないことは何か、このような状況下であるからこそ実現できる最大限の効果とは何かを、教員仲間と考えていました。「これは教えなければならない」というコアの部分は結局、変わらず、そこを変えないために日々、考えていました。

キャンパス間の移動が無くなったことで、特にオンデマンド形式の授業では履修者数が桁違いに増えたと聞きます。今まで学生たちは池袋-新座間の移動があったために諦めていたようですが、そのような制約がなくなったことで、楽しそうに授業を受けている印象を受けています。授業をする身としては、普段よりも多様な所属の学生から様々な意見がもらえることが面白いです。違う学問分野の人たちに心理学はこういうことをやっていると知ってもらえるのも嬉しいことです。

教育の普遍性

―― これからの教育活動で普遍的に大切にしたいことについてお考えがあれば教えてください

浅野：脳裏に浮かんだ言葉は聖書の一節に由来する「求めよさらば与えられん」です。コロナ禍になり、制約がある中でも教員は与えることをできるだけ頑張ったと思います。完璧でなかったことは分かっていて、学生が気の毒だと思うこともあります。学生はもともと求めるために大学に来ています。ただ、同時に思うのは、大学で満足に学ぶためには、求め方を知らないといけないということです。今のような状況になって、上級生の方が求め方を知っていると感じました。どのようなものを求めるべきか、求める場合にはどのようなオプションがあるか、何を求め得るかを、上級生ほど分かっていて、うまくオンラインも活用してアクセスしていたのに対して、1年生は求め方を知らなかった分、辛かっただろうと思いました。

何をつかみ取ることが期待されているかを分からなかった場合に人に聞くということも、求め方の一つだと思いますが、その求め方、つまり質問の仕方を教えることも大学で必要なことなのだろうと気づきました。普段であれば、友達や先輩、大学教員などを見ている中で、こんな人もいるとか、それは聞いてよいのかとかが分かるのでしょうが、そういった部分が消えてしまったと思います。そのため、求めたら与えられるようにしたいし、それができるように求め方を教えたいです。求め方を教えるのが大切なのかなと思いました。

インタビューまとめ：助教　山路 茜

センター長あいさつ

当センターでは2020年度4月にセンター長が交代しました。以下に、センター長からのメッセージをお届けします。

センター長・教学IR（Institutional Research）部会長
小澤 康裕（経済学部准教授）

2020年4月よりセンター長を務め、2021年4月からは教学IR（Institutional Research）部会長を兼任しております経済学部の小澤です。私自身は、2009年4月にセンター員に任命され、在外研究の期間を挟んで、2011年9月からTL（Teaching＆Learning）部会のセンター員、その後、副センター長（部会長）を務めてまいりましたので、10年以上の関わりがあることになります。

その間、教育現場の実体験を活かしながら、また、先生方や学生の皆さんの助けになることを少しでも実施できればという想いから、種々のシンポジウムやワークショップの開催、「大学教育開発研究シリーズ」や「TA・SAハンドブック」の作成、「Master of Writing」及び「Master of Presentation」、「ルーブリック」の開発等に携わりました。

また、教学IR（Institutional Research）部会では、授業評価アンケート、学修状況調査や卒業後調査等の学生調査の実施と分析、各種教学データの集計等を行っています。先生方や学生の皆さんの協力等を得て得られるこれらの調査結果は、まさに今の本学の教育活動を表す鏡であり、全学的な教育改革・カリキュラム改善のための貴重な資料となります。今後はこれらの調査結果のさらなる有効活用にも注力していきたいと考えています。

今後も、本センターの活動内容を国内外に広く発信し、大学教育に携わる様々な方々と連携し、本学だけでなく日本全体の高等教育の改善に貢献できれば幸いです。

皆様のますますのご支援、ご協力をお願い申し上げます。

編集後記

新型コロナウイルスが教育に与えている影響は計り知れません。悪い面もあれば良い作用の場合もあります。今回、立教大学教育活動特別賞を受賞された方の、模擬授業や実践の解説（春学期FD講演会）、コロナ禍以前と今とを振り返った教育活動への想い（インタビュー）に触れ、学生に学びとってほしいものを最大限生み出す手段を試行錯誤する教員の熱意と努力は、きっと学生のよい大学生活につながるだろうと確信しました。（山路）

「MOVE 第26号」
立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2021年9月28日発行
発行　立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel：03-3985-4624　Fax：03-3985-4615
E-mail：cdshe@rikkyo.ac.jp
https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html